

◎食のリスクコミュニケーション・フォーラム 2016 第4回 『消費者の食の安心につながるリスクを議論する』

【開催日】 2016年10月30日(日) 13:00~17:50

【開催場所】 東京大学農学部フードサイエンス棟 中島董一郎記念ホール

<http://www.a.u-tokyo.ac.jp/campus/overview.html>

【主催】 NPO 法人食の安全と安心を科学する会 (SFSS)

【共催(協賛)】 一般財団法人社会文化研究センター

【後援団体】 消費者庁、東京大学大学院農学生命科学研究科附属食の安全研究センター

【定員】 先着50名

【参加費】 3,000円／回 (当日会場にて現金で申し受けます)

*メディア関係者、後援団体関係者、SFSS会員は参加費無料

【参加申込み】 http://www.nposfss.com/form_riscom2016.html (10月27日で受付終了)

*4回シリーズになりますが毎回お申込み／事前登録が必要です。

【お問い合わせ】 SFSS 事務局まで

(TEL/FAX : 03-6886-4894、email : nposfss@gmail.com)

【各演者の講演要旨】

① 広田 鉄磨 (関西大学 特任教授、(一社)食品プロフェッショナルズ 代表理事)

『食品防御 対策編』

2015年4月の「フードディフェンス上のリスクがなぜ極大化して伝えられるのか」では日本の食品防御が如何に形作られてきたかを振り返り、監視カメラ偏重の傾向が歴然としていること、しかしながら監視カメラの犯罪抑止効果には大きな疑問があることを述べました。今回の「対策編」では 最近のFSMAの動きにも配慮しながら 日本での食品防御のあるべき姿を探ります。端的に申し上げますと、テロというスケールの犯罪には対処のしようもなく、いわゆる悪意ある混入程度までの個人による犯罪に対策を集中していくことが妥当であろうという結論に至りました。そのため対策の多くは企業風土の改善に頼ることになります。

② 新山 陽子 (京都大学大学院 教授)

『食品由来ハザードのリスク認知の特徴と双方向リスクコミュニケーションモデル
—放射性物質の健康影響』

2011年福島第一原子力発電所事故から5年がたちましたが、まだ住民の人たちの暮らしや農産物の取り扱いが元に戻っていません。

さまざまな事故のリスクに対して、専門家のリスク評価が科学的な知見にもとづいてなされ、一般市民のリスク評価は主観になされるため、両者の間にときに大きなギャップが生まれることが知られています。では、食品に対するリスク知覚にはどのような特徴があるのか、とくに放射性物質の食品を介した健康への影響のリスクについてはどうかを、調査の結果をもとにお

話しします。

事故によって放出された放射性物質に対して市民の間に大きな不安が生まれ、必要とする情報の不足がそれをより大きくしましたが、このような緊急事態の時にどのようなリスクコミュニケーションを行えば、市民にとって納得のゆく状態が得られるのか。新しい双方向のリスクコミュニケーションモデルを開発し、実証を行いましたので、その結果についてお話しし、リスクコミュニケーションのあり方と一緒に考えてみたいと思います。

③ 山崎 肇 (NPO 法人食の安全と安心を科学する会 (SFSS) 理事長)

『不安な消費者にむけての”やさしい” リスコミのコツ』

食品のリスク管理責任者が消費者にリスク情報を伝達する際に大切なことは、消費者のリスク認知の特徴を社会心理学的に学び、当該消費者にとっての健康リスクの大小を正確に理解できるようなコミュニケーション手法を習得することだ。①食品中ハザードのリスク評価が綿密にできているか、②その健康リスクが当該消費者にとって許容範囲かどうか、この2点を伝えれば消費者自身が安全か否かの判断ができるはずだが、不安な消費者へのリスコミはそう容易ではない。消費者のリスク認知バイアスを逆手にとった”やさしい” リスコミのコツを参加者の皆様と議論したい。

【本フォーラムの主旨】

毎回、食のリスクに詳しい有識者をお迎えし、講師3名（Q&A含み60分）+総合討論（90分）：13:00～17:50（休憩20分）の構成とします。総合討論では、消費者の「食の安心」につながるリスクコミュニケーションについて、会場からの質問に講師が回答する形で議論します。

以上